

# 今から間に合う！台湾プロ野球入門

台湾国際放送パーソナリティー/台湾野球ライター 駒田 英

## はじめにー過去最高の盛り上がりを見せている台湾プロ野球ー

今年36年目のシーズンを迎えた台湾プロ野球（中国語：中華職業棒球大聯盟、英語略称：CPBL）は、過去最高の盛り上がりを見せている。

本稿執筆時点（6月3日）で、1試合平均の観客数は9,291人。これは過去最多だった昨年（同7,684人）に比べ20.91%増、一昨年（同6,000人）との比較では、約55%増となっている。

12球団で、1試合平均31,098人（2024年）の日本プロ野球と比較すれば、スケールの小ささは否めないが、日本の約5分の1の人口やスポーツファンの絶対数、かつて八百長事件やリーグ分裂などで人気低迷、一時は平均2,000人を下回り、球団の解散のみならず、リーグ存続も危ぶまれた事があったと考えると「隔世の感」だ。

台湾プロ野球自体について様々な角度からご紹介する前に、なぜ今、これほど盛り上がっているのか、その背景を説明しよう。

まず、昨シーズン、過去最高の観客動員数を記録した最大の要因は、台湾初の室内球場、台北ドームの運用開始にある。ファン待望のドーム球場は、他球場に比べチケットは割高だが、快適な観戦環境、物珍しさもあり新たなファン層を開拓、主催38試合の平均観客数は2万人を越えた。これに加え、新球団の台鋼ホークスが一軍に参入、16年ぶりに6球団制が復活したことで対戦カードが増え、見ごたえもアップした。

もちろん、今や日本でもお馴染み、応援歌やチャンステーマに合わせ、三塁のベンチ上のステージでファンを盛り上げるキュートなチアリーダー

の存在も忘れてはならない。台湾では彼女たちが踊る内野ステージ前から席が埋まってい、個人グッズも販売されている。これに加え、各球団が週末を中心に企画する各種イベントデーも好評で集客に寄与している。

そして、今シーズン、観客数がさらに伸びている要因は、国際大会の好成績だ。台湾人は、世界に向けて台湾の存在、そして実力を示すことができる機会である国際大会への関心が極めて高く、普段は野球を見ないが、国際大会では代表を熱狂的に応援する、という人たちも少なくない。過去においても、国際大会の好成績が台湾プロ野球の観客動員向上につながってきた。

こうした中、昨年11月、WBSC（世界野球ソフトボール連盟）が主催する国際大会「プレミア12」において、台湾は決勝で日本を4-0で下し、主要国際大会で初優勝を果たした。

低かった下馬評を覆し、台北ドーム等で行われたオープニングラウンドを突破、スーパーラウンドではアメリカ、そして決勝では今大会の2試合を含めオールプロのトップチーム同士の対戦では9連敗中だった日本を初めて下しての優勝。まるで映画のようなストーリーに加え、「チャイニーズタイペイ」名義での出場を余儀なくされる中、大会MVPに輝いたキャプテンの陳傑憲（統一7-ELEVEnライオンズ）をはじめ、メンバーが記者会見やグラウンド上で、様々な形で「TEAM TAIWAN」をアピールした事も、主に若い世代の感動を呼んだ。

一躍、国民的英雄となった選手たち、帰国便はF-16戦闘機がエスコートし、翌日には祝賀パレードと総統府でのセレモニーも開催された。こ

れまでも野球は台湾の「國球」と呼ばれてきたが、プレミア12の優勝で台湾における位置づけは、より高まった印象を受ける。

さらに、今年2月には台北ドームで、来年3月のWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）の本戦出場をかけた予選が開催された。プレミア12の代表との重複は、上述したキャプテンの陳傑憲のみ。メンバーはほぼ総入れ替えとなり、若手主体の代表は最終戦までもつれる苦戦を強いられたものの、スペインを下し出場権を獲得、野球熱を冷ますことなく、開幕へとつないだ。

両大会の台湾代表28人中、プレミア12は26人、WBC予選は22人が台湾プロ野球の球団所属の選手であった。今シーズン、台北ドーム開催試合の観客数は昨年比で12%ほど減少している中、他の球場では軒並み増加しており、新たなファンが球場に足を運んでいることがうかがえる。

本稿では『台湾プロ野球観戦ガイド&選手名鑑』の執筆者の一人である筆者が、観戦にあたって必要な基礎知識に、楽しみが広がるよりマニアックな情報もまじえご紹介したいと思う。

## 再び6球団制が復活した意義

現在、台湾プロ野球は、中信兄弟、統一7-ELEVEnライオンズ、楽天モンキーズ、味全ドラゴンズ、富邦ガーディアンズ、台鋼ホークスの6球団で行われている。

球団の解散や身売り、リーグ分裂や合併など、台湾プロ野球36年の激動の歴史の詳細についてはスペースの都合上、割愛するが、16年ぶりに6球団制が復活するまでの流れについては触れておこう。

2003年の両リーグ合併後、台湾プロ野球は6球団で行われていたが、2008年、八百長事件の影響で1球団が資格停止、1球団が解散となり4球団に。その後も身売り、買収が行われながら、なんとか4球団を維持していた。

ようやく2019年4月、味全が待望の「第5の球団」としてリーグ参入を発表した。1990年、台湾プロ野球初年度の4球団のうちの一つだった味全は、リーグ三連覇を果たした1999年、新たな経営陣が、2リーグ分裂、台湾中部大地震の影響など球団経営を取り巻く環境の悪化を受け球団を解散しており、事実上20年ぶりの「復活」であっ



写真1 2023年、台湾王者に輝いた味全ドラゴンズ（中華職業棒球大聯盟(CPBL) 提供)

た。なお、味全は2023年、一軍参入3年目で24年ぶりとなる台湾王者に輝いている。

しかし、その数ヶ月後の2019年7月、Lamigoモンキーズが経営難により球団身売りを決断、同年9月、日本の楽天に球団経営権を譲渡した。Lanewベアーズを前身とするLamigoモンキーズは2011年の桃園移転から2019年まで9年間で6度台湾王者に輝いたチーム。韓国プロ野球からインスピレーションを受け、従来の応援に電子音楽を取り入れ、チアガールを大幅増員、内野全席をホーム席とするなど、現在の台湾式応援の礎を築き、2010年代、実力、人気でリーグを牽引したチームであった。楽天はLamigoに敬意を払い、本拠地桃園の「園」の音にかけた「猿」、モンキーズの名を引き継ぎ、「楽天モンキーズ」となった。

そして、2022年、立法委員であるCPBLの蔡其昌コミッショナーの働きかけもあり、本業は鉄鋼のコングロマリット、台鋼グループが、台湾南部のスポーツ界を盛り上げたいと、「第6の球団」として参入、台鋼ホークスが誕生した。

台鋼は台湾プロ野球黎明期のような前身の実業団チームをベースとしたプロ化でもなく、実質的な「復活」で、往年のファンが残っていた味全とも異なり、選手もファンも完全にゼロからの新球団だが、CPBLの職員出身、日本通の劉東洋GMのもとで奮闘している。翌2023年、二軍公式戦に参加した台鋼は、昨年一軍に参入、台湾プロ野球は苦節の時を乗り越え、16年ぶりの一軍6球団制が復活したのである。

## 実施要項の紹介

### 1) 公式戦、ポストシーズンのレギュレーション

台湾プロ野球の公式戦は前、後期制で、各チーム前期60試合、後期60試合、年間120試合戦う。公式戦終了後、プレーオフ、台湾シリーズと続く

ポストシーズンのレギュレーションはやや複雑であり、下記のようになっている。

#### 前期、後期の優勝チームが異なる場合

- ① 「前、後期の優勝チームのうち、年間勝率の低い半期優勝チーム」と「前後期の優勝チーム以外の4チーム中、年間勝率が最も高いチーム」との間で、5戦3勝制のプレーオフを戦う。ただし、「年間勝率の低い半期優勝チーム」には1勝のアドバンテージが与えられる。
- ② このプレーオフの勝者と、「年間勝率の高い半期優勝チーム」との間で、7戦4勝制の台湾シリーズを行う。

#### 前期、後期の優勝チームが同じ場合

- ① 年間勝率2位チームと、同3位チームが、5戦3勝制のプレーオフを戦う。
- ② このプレーオフの勝者と、「年間勝率1位チーム」との間で、7戦4勝制の台湾シリーズを行う。ただし、「年間勝率1位チーム」には1勝のアドバンテージが与えられる。

昨シーズンは、前期を統一、後期を中信兄弟を制した。そして、年間勝率1位の中信兄弟は台湾シリーズへ直接進出を決めた。年間勝率で中信兄弟を下回った統一は1勝のアドバンテージをもって、前後期優勝チーム以外の4チーム中、最も勝率の高かった楽天とプレーオフで対戦、統一は第3戦で2勝目をあげ、トータル3勝として台湾シリーズに進出した。7戦4勝制の台湾シリーズでは、中信兄弟が4勝1敗で統一を下し、2年ぶり10度目の台湾王者に輝いた。

### 2) 日本プロ野球との差異

実施要項の中から、主に日本プロ野球と異なる点を紹介しよう。一番の注目は、試合時間短縮の一環として、昨シーズンから、「延長タイブレーク」、「ピッチクロック」が採用されたこと、「ピッ

球団名 / 業種	一軍本拠地 / 今季試合数 / 収容人数
中信兄弟 (中信兄弟) / 金融	臺中洲際棒球場 / 47 / 約 20,000
統一 7-ELEVEn ライオンズ (統一 7-ELEVEn 獅) / 流通	台南市立棒球場 / 47 / 10,000
楽天モンキーズ (楽天桃猿) / IT	樂天桃園棒球場 / 53 / 20,000
味全ドラゴンズ (味全龍) / 食品	台北市立天母棒球場 / 40 / 10,000
富邦ガーディアンズ (富邦悍將) / 金融	新北市立新莊棒球場 / 54 / 12,150
台鋼ホークス (台鋼雄鷹) / 鉄鋼	高雄市立澄清湖棒球場 / 48 / 20,000

チコム」の使用も解禁された点であろう。

延長は12回まで行うが、延長10回からは無死二塁からのスタートとなる。2023年は300試合で11試合あった引き分けが、「延長タイブレーク」が導入された昨シーズンは360試合でわずか2試合まで減った。

投手が打者に投球するまでに使える時間、打者が構えるまでの時間を制限する「ピッチクロック」について、ここでは投手の規定のみ説明しよう。投手はボールを受け取ってから走者がいない場合は20秒以内、走者がいる場合は25秒以内に投球動作に入らなくてはならない。これに違反した場合、自動的に1ボールが追加される。また、プレートを外す回数は走者がいる場合、牽制を含め各打席3回まで、と規定された。

投手と捕手間でサインの伝達に使われる電子機器である「ピッチコム」も使用が解禁され、味全や統一の、主に外国人投手が使用している。

こうした取り組みの結果、昨年2024年の平均試合時間は3時間8分と、2023年の3時間22分に比べ14分短縮され、今季は本稿執筆時点（6月3日）で2時間54分と、さらに14分短縮、2年で約30分短縮と功を奏している。

もう一点、日本との大きな違いはドラフト会議の実施時期と方法だ。かつては台湾も秋に行われていたが、兵役の制度改正や6月に卒業する高校生をできるだけ引き留める事を目的に、2013年から6月末ないし7月初旬に行われるようになった。台湾プロ野球のドラフトは完全ウェーバー制で、前年の年間順位の最下位チームから順に指名する。今年6月30日に行われるドラフトの指名順は、台鋼→富邦→味全→楽天→統一→中信兄弟となっている。

## 6チームの本拠地、チケット購入方法

下記の表は、左に球団名（日本語/中国語）と親会社の業種を、右に一軍の本拠地、今季の一軍公式戦の試合数と、同球場の概ねの収容人数を記している。

昨季は38試合、今季は52試合開催される台北ドームは、いずれの球団の本拠地でもない。このほか一軍公式戦は、南部、嘉義市の嘉義市立棒球

場で8試合、東部、花蓮県の花蓮縣立徳興棒球场で5試合、同じく東部の台東県の台東棒球场第一棒球场で4試合、中部、雲林県の斗六棒球场で2試合行われる。詳細日程は、CPBLの公式ウェブサイトの「赛程SCHEDULE」で確認できる。

公式戦は、スター選手の引退試合などを除き、おおむね球場で当日券の購入が可能だが、その際はざっくりとしたエリア指定しかできない。一方、前売り券は球団公式アプリを通じて購入する球団、二大コンビニ（セブンイレブンないしファミリーマート）の端末、ウェブサイトを通じて購入する球団と、各球団で購入方法が異なる為、最初は検索サイトで「(主催球団の球団名)、門票」と検索し、会員になろう。

多くの球団で、通常の座席のほか、ペアシートやファミリー・団体向けシート、さらに食事付きシート、バーベキュー席など、観戦人数やニーズに合わせた座席を選択できる。ちなみに台南球場のライト線脇には「ダイヤモンドシート」、楽天桃園球場には一、三塁内野スタンドからせり出す形で「Rock Seat」と呼ばれるフィールドシートがある。

## 観戦に向けて覚えておきたい主力選手、日本人選手&指導者

続いては観戦をより楽しむ為の情報だ。覚えておきたい各球団の主力選手、日本人選手や指導者、日本球界にゆかりのある選手、さらに異国で奮闘中の日本人チアリーダーの皆さんを紹介しよう。

### 中信兄弟

中信兄弟を率いるのは、現役時代はオリックスや阪神に在籍、シユアな打撃と小技、内外野をこなす高い守備力でチームに欠かせぬ存在だった平野恵一監督だ。一昨年の年末、前監督の電撃辞任を受け、白羽の矢が立った。前期は3位に終わったものの、戦術を調整しながら後期は「全員野球」で快進撃、チーム史上最多勝となる年間70勝をあげ、台湾シリーズも制した。厳しくも愛のある指導、押し付けずコミュニケーションを重視するスタイルは、新しいタイプの日本人指導者として評価されている。監督2年目の今季は「若手を育



写真2 中信兄弟・平野恵一監督（中華職業棒球大聯盟(CPBL) 提供)

てながら勝つ」という難しいテーマに挑戦する。

台湾人の主力選手では、このオフ、10年1億4788万台湾元（日本円約7億800万）の大型契約を結んだプレミア12代表ショート、江坤宇の流れるような守備、WBC予選代表の外野手、身体能力が高い宋晟睿などに注目だ。

なお、公式チアリーディングチーム「Passion Sisters」には今季から、読売ジャイアンツ公式マスコットガール「ヴィーナス」出身の桃子さんが加入。数字の「1」のようにI字バランスをとる通称「1位ポーズ」は、台湾でも話題となっている。

### 統一7-ELEVEnライオンズ

統一の注目選手は、何と言っても優勝したプレミア12のMVPで、WBC予選にも出場したキャプテン陳傑憲だ。統一でも巧打と好守、高いキャプテンシーで、チームを牽引する。高校は岡山県共生高校に留学、吳念庭（台鋼）の一年後輩だった。

投手では、セットアッパーとして奮闘する36歳の「日本人オールドルーキー」高塩将樹がいる。BCリーグ2チームを経て、27歳で来台、台湾の

社会人チームで7年半プレーした。CPBLでは2021年、外国人留学生や、5年以上台湾に定住し社会人で3年以上プレーした外国人選手をドラフト対象とする新たな条項を設けたが、3度目の参加、35歳で迎えた昨年のドラフト会議で統一から6位で指名され、初の適用者となった。

チームのチアリーダー「Uni-girls」には昨年から、日台ライオンズの交流イベントがきっかけで台湾プロ野球に関心をもったという、埼玉西武の公式パフォーマンスチーム「bluelegends」出身のNozomiさんとChihiroさんが在籍、2人によるチャンステーマ「制覇天下」の掛け声、「AAOA」は大きな話題となるなど、高い人気を集めている。

### 楽天モンキーズ

楽天は2019年に富邦のバッテリーコーチに就任、台湾球界は7年目となる元近鉄の捕手、古久保健二監督が昨季に続き指揮を執る。昨年は苦しいチーム状況の中、年間3位となり、プレーオフ進出を果たした。

まず注目選手として挙げられるのは、リーグ最強台湾人打者、プレミア12代表の林立だ。これ



写真3 統一7-ELEVEnライオンズ・陳傑憲（中華職業棒球大聯盟(CPBL) 提供)

まで3度の首位打者に輝くなど高い打撃技術はお墨付きだが、林立には長打力、足もある。今季は同じくプレミア12代表の章馱天男、陳晨威の打撃が好調だ。

投手では、横浜DeNA、千葉ロッテで実働7年プレーした陳冠宇がいる。昨シーズンは帰国後最高の成績を残し、プレミア12でもチーム最多の6試合に登板、無失点と優勝に貢献した。「チェンチェン大丈夫～」と日本語で連呼される登場曲は、是非生で聞きたい。

Rakuten Girlsの高橋佳帆（KAHO）さんは、東北楽天ゴールデンイーグルスの公式チア「東北ゴールデンエンジェルス」出身。昨年6月にデビューを果たし、この一年間、夢だったという台湾の地で活動の幅を広げている。

### 味全ドラゴンズ

味全のエースは目下CPBL最高の台湾人投手、WBC予選代表の徐若熙だ。MAX158、平均150キロ超えの直球に、魔球スプリットチェンジのコンビネーションで三振の山を築く。このオフにも海外FAを取得の予定で、日米球界のスカウトが熱視線を注いでいる。

二軍公式戦に参加した2020年、内野守備コーチに就任、その後、様々なポストを歴任し、昨年6月から一軍ヘッドコーチをつとめるのが、現役時代、近鉄や東北楽天で活躍した高須洋介コーチだ。鋭い観察眼で球団から高い評価を受けている。

なお、CPBLの通算本塁打記録（304本）をもつ43歳の林智勝は今シーズン限りで引退、9月5日から7日の3日間、台北ドームで引退試合を行う。

### 富邦ガーディアンズ

最大の目玉は、昨年アメリカから帰国し、CPBLドラフト会議では全体1位で指名された元メジャーリーガーの内野手、張育成だ。4月中旬、スライディングの際に左肩を痛め休養していたが、6月1日の復帰戦では、いきなり本塁打を含む猛打賞と活躍した。圧巻のパワーに注目だ。

投手ではオリックス、埼玉西武に在籍した張奕がいる。張は高校から日本へ留学。福岡第一、日本経済大を経て、外野手として育成ドラフトでオリックス入り。その後、投手に転向し通算4勝をあげた。肩の怪我の影響もあり、現役ドラフトで移籍した埼玉西武を戦力外となり帰国。昨年の



写真4 富邦ガーディアンズ・張育成（中華職業棒球大聯盟(CPBL) 提供)

CPBLドラフトで富邦から2位で指名された。プレミア12決勝の日本戦では二番手で3回無失点と好投、勝ち投手となった。今季はかねてから希望していた先発に転向し初先発初勝利も、その後、高温多湿の気候に苦しみ中継ぎへ配置転換が決定。ただ、短いイニングでは実力を発揮してくれるだろう。このほか、今年2月、WBC予選の最終戦では、15球全球ストレートで押したクローザー、MAX158キロの曾峻岳の剛球も見逃せない。

### 台鋼ホークス

劉東洋GM、洪一中監督が日本野球の良い部分を取り入れたいと考えている台鋼には、多数の日本人指導者、選手が在籍している。また、台湾人選手、外国人選手にも日本プロ野球の経験者が多い。

かつてオリックスに在籍、昨夏、オイシックス新潟から途中加入した吉田一将は昨季はクローザーで活躍、今季からは先発に転向し奮闘している。元広島のブレイディン・ヘーゲンズは、昨季の台鋼移籍以降負け無し、エース級の活躍だ。打者では、こちらも中日やオリックスでプレーした

スティーブン・モヤが大爆発、ホームランダービーのトップを独走している。

台湾人選手も元北海道日本ハムの王柏融、元埼玉西武の呉念庭がおり、日本のファンにおなじみの選手が多い。一軍投手コーチを務めるのは自身もかつて台湾プロ野球でプレー、最多勝を獲得した元西武の横田久則氏だ。

上記の選手達は紹介したい選手のうちのほんの一部だ。筆者は昨年に引き続き、今年も同好の士である木本健治氏とコンビを組み『台湾プロ野球観戦ガイド&選手名鑑』を出版した。より深く台湾野球について知りたい方は同書を参考にいただければ、と思う。

### 台湾野球の魅力について

筆者が台湾プロ野球を本格的に追うようになったのは2003年、それまでCPBLとTMLの2リーグに分裂していたリーグが合併し、新生CPBLとして1リーグ6球団となった年である。日本の仕事を辞め2006年に語学留学で来台してから、そのまま台湾で暮らし続けているのも、台湾野球に魅せられたことが大きな理由の一つだ。

台湾野球が好きで追いかけていると話すと、かつては台湾人から「日本やアメリカの方がレベルが高いのに、なぜわざわざ？」と不思議がられ、最近では、多くの日本の方に「ああ、チアリーダーのお姉さんが可愛いよね」と笑われ、そこから話が広がらない事が多い。彼女たちが魅力的である事はもちろんだが、台湾野球の魅力は、台湾そのものの最大の魅力と同様、「人の温かさ」や「距離の近さ」だと感じる。

記者として取材をさせていただき現在は、節度を保つようにしているが、今でもスター選手やコーチ陣の気さくな対応に感動する事が多い。選手同士の間柄も日本に比べるとずっと緩く、ベンチからは一体感が伝わってくる。

ちなみに台湾の野球は、木製バットを使う本格的な硬式野球部のある高校が全国で約40校という少数精鋭だ。中でもプロ選手は一部の強豪校のOBに集中している。熱心なウォッチャーはアマ野球からチェックしており、小学生時代からプレーを見続けてきた選手がプロ野球や国際大会で活躍するケースも珍しくない。ファン視点からいえば、こうした点も、より身近さを感じ、応援しなくなる要因となる。

なお、今年の夏、南部・台南市郊外の安南区の「亞太國際棒球訓練中心」ではWBSC主催の12歳以下のワールドカップ「WBSC U-12ワールドカップ」、そしてBFA（アジア野球連盟）主催の15歳以下のアジアナンバーワン決定戦、「第12回 BFA U15アジア選手権」が開催される。こうした機会に、台湾のアンダー世代試合を観戦し、気になった選手をここから長期間フォローしていくのも台湾野球の一つの楽しみ方だ。

野球強豪国の中では、決して選手層は厚いとはいえ、アンダー世代以降、成人世代の国際大会では厳しい戦いを強いられることも多いが、もちろんプレー自体も魅力的だ。その身体能力、潜在能力の高さについては日本人コーチも口を揃えるが、近年は課題と言われてきた守備に安定感が増してきた。そして、海外から注目される好投手も多数育ってきている。また、昨年のプレミア12が最たる例だが、勢いに乗ると予想以上の実力を発揮する。そんな「意外性」も魅力だといえよう。

もちろん解決すべき構造的な課題もある。主に高卒生、20歳以下のプロスペクトの海外流出問題だ。彼らの選択は尊重されるべきだが、毎年複数人、年によっては有望な選手、特に投手が十人

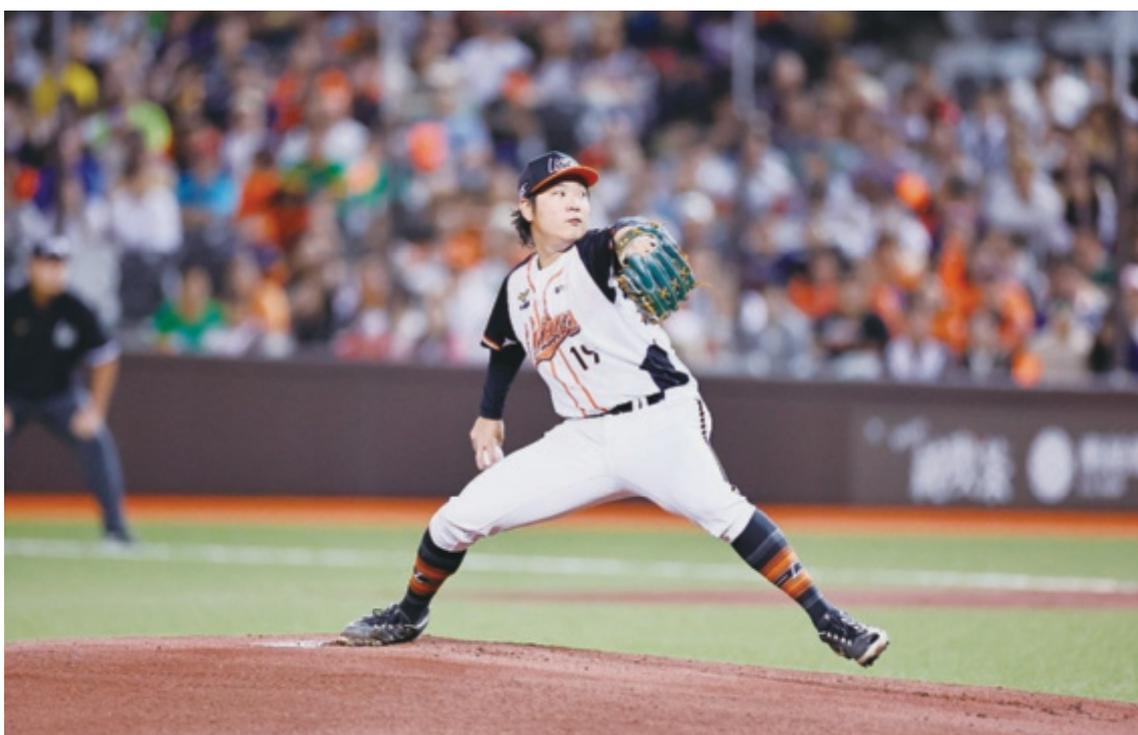


写真5 北海道日本ハムに移籍した古林睿煬（中華職業棒球大聯盟（CPBL）提供 ※写真は統一7-ELEVEnライオンズ在籍時）

近く日米球界に直接進んでしまう為、台湾プロ野球各チームの先発投手は外国人頼みになってしまっているのだ。

こうした中、昨シーズンは台湾プロ野球で台湾人投手として18年ぶりにMVPを受賞し、統一から海外ポスティング制度を利用し北海道日本ハムへ移籍した古林睿煬という「成功例」が生まれたことは、明るい話題だ。現在、負傷離脱中だが、高い潜在力はすでに示している。

台湾球界関係者やファンの中に、選手がより高いステージに挑戦する事自体を反対する人はいない。古林のようにプロスペクトたちがまず台湾プロ野球に進み、実績をあげてから日本やアメリカを目指す選択をするようになれば、台湾プロ野球の各球団にとってもメリットが生まれ、リーグのレベル、人気はさらに高まるだろう。

## おわりに

過去のWBCやプレミア12などの現地取材で、台湾の人々にとって野球は、様々な「違い」を乗

り越え、共に誇りを感じることができる「いちスポーツ」を越えた存在だと度々感じてきた。

台湾のある記者の友人は、台湾における日本野球の情報量や向けられる関心の高さと、その逆との格差について嘆く私に対し、「それは仕方がない。日本の方がずっと強いし、台湾人は気にしないよ」と笑ったが、プレミア12で台湾野球の実力を世界に示した今、そして、台湾プロ野球が過去最高の盛り上がりを見せている中、日本でも、台湾野球に関心をもつ方が少しでも増えたら嬉しいと思う。そして、この最高のタイミングで執筆の機会を頂いた日本台湾交流協会の皆様に心から感謝したい。

なお、台湾野球の歴史、日台野球の交流史については、ジャーナリストの野嶋剛氏が「交流」2020年3月号、6月号、9月号に三回に渡って『「野球と棒球」白球がつなぐ日台百年史』を寄稿された<sup>1</sup>。知られざる歴史にスポットライトを当てた非常に興味深い内容であり、是非あわせてご覧頂きたい。

1 野嶋剛「『野球と棒球』—白球がつなぐ日台百年史（前篇）野嶋剛」（『交流』2020年3月号）<<https://www.koryu.or.jp/publications/magazine/2020/tabid3438.html?itemid=1576&dispmid=12423>> ほか